チーム方式による協同作業あるいは問題意識を共通にした人々による論文集の形で成果が発表されてるい場合が目立つことなどである。こうした動きの中にあるものを読み取っていただけるなら、ささやかな書評の文章はその役割りを果すことが出来たのであり、評者にとり誠に大きな悦びである。

Die Funktion der Theologie in Kirche und Gesellschaft. Beiträge zu einer notwendigen Diskussion, hrg. von P. Neuenzeit, München, 1969

本書はカトリック系の書店 Kösel Verlag によって出版された論文集である。しかし執筆した二四名の顔ぶれを見ると、カトリック・プロテスタントの双方から神学者が参加しているに留らず、哲学・心理学・社会学などの領域から専門家が寄稿していると共に、幾人もの評論家が筆をとっている。本書が成立した背景は第二ヴァティカン公会議以後の流動的な状況のなかで、六〇年代後半にカトリック神学における学問と現実との遊離があらためて取り上げられたことである。事柄の性質上それはプロテスタント神学においても真剣に受けとめられていた問題であり、ここに期せずして協同の探究への道が開かれたのである。本論文集の特色は執筆者がそれぞれ関心ある主題を論ずるのではなく、教会および社会における神学の機能を各自の専攻領域から批判的に検討したところにある。したがって本書において主題に関する多様な見解を読むことになるのは止むを得ない。しかしながら課題の大きさ深さにひるまず取り組もうとした試みとして、この書物がもつ意義は決して少くないと云えるであろう。

Theologie als Wissenschaft in der Gesellschaft. Ein Heidelberger Experiment, hrg. von H. Siemers & H. R. Reuter, Göttingen, 1970

この書物はその副題が示すようにハイデルベルク大学神学部の関係者による貴重な試みの成果を示している。その内容は一九六八年から六九年にかけて行われた、神学の基本問題および社会における機能を明らかにする連続討議における発題をもとにしたものである。大学において教授と学生との対立が激化してきた只中で、あえて神学とは何かを討論の中心にすえようとした姿勢は意義を失わないであろう。しかしそれ以上に、収録された一二の論文の執筆者（うち経済学および哲学専攻の各一名以外はすべて神学専攻）は、その殆どが一九三〇年代の生れである点は、本書の性格を良く示している。この様に比較的若い世代から神学の存立基盤への問いや、神学各部門の今日における在り方に関する発言がなされている。また各論のあとに討論の要約と参考文献がつけられており、当時の問題意識をよみとるに便利である。さらに本書に示されている各種の問題提供は、その頃ひろい盛り上りを見せていた神学教育改革の運動のなかに次第に具体化（たとえばシリーズ《Reform der theologischen Ausbildung》一一巻、一九七四年まで刊行）していることは見逃せない点であろう。

F. Mildenberger, Theorie der Theologie. Enzyklopädie als Methodenlehre, Stuttgart, 1972

著者ミルデンベルガーは一九二九年生れであり、現在エルランゲン大学において組織神学教授として活動している。本書はこんにち神学が一方で批判精神を喪失したとして、他方で教会の関心事から遊離したとして非難されている問題を受けとめる所から出発する。著者は神学の学問としてのあり方とその教会との係わりとを緊張として把握しようとしている。そして神学の理論的反省には歴史的批評的および教義的規範的という両者が層をなしており、さらに人間科学の提起する問題との接触によって経験的批判的反省として結実すべきことを説いている。そのほか神学各部門に関する叙述や神学教育の改革について言及があるが、全体として一五〇頁そこそこの著作であるため説得力のある主張には今一息の感がする、この点は本書についてその問題意識が鮮明であるだけに惜しまれるところであろう。ただ各章ごとに親切な註が参考文献と一緒に巻末にしるされており、神学概論を腰を落ちつけて学んで行こうとする者に良き

書評

最近の「神学概論」について

高森　昭

ここにまとめられた文章は、最近のドイツ語圏神学にあらわれている、「神学概論」および関連した内容の著作を、文献解題の意味をこめて記したものである。言及された著作は約二〇冊に達してはいるものの、それぞれに関して詳細な叙述をなすことが紙数の関係で不可能であり、執筆者としても残念に思っている。しかしながら、一九六九年より執筆の時期（七六年秋）までの八年間にわたって発表された幾つもの著作を概観することによって、われわれは「神学とは何か」の問いに現代神学が如何に取り組みつつあるかを把握し得ることであろう。たしかに従来は神学概論を記して発表するのは、円熟した著名な神学者である場合が多かったように思う。この意味ではバルト「福音主義神学入門」（一九六二年）はながく記憶されるべき著作であると云えよう。しかし最近の神学概論として発表された著作を見渡すときに、そこに或る変化が表われ始めており、神学界の世代交替を示す兆候を見せていることが感じられる。その端的な表われは比較的わかい神学者の中から神学概論を発表して世に問う事例が増えてきていることや、学際研究を取り入れた

指示を与えている。

H.-M. Barth, Theorie des Redens von Gott. Voraussetzungen und Bedingungen theologischer Artikulation, Göttingen, 1972

本書の著者H・M・バルトは前述のミルデンベルガーよりも更に若く一九三九年の生れである。この著作はキリスト教神学の課題を如何に神を語るかの問題であるとする視点より考察されたものである。したがって本書の形態はこれまで普通に行われてきた神学概論のようにはなっていない。著者は先ず神から語りかけられる人間、イエス・キリストにおいて人間に語り給う神の証し、さらにこの証言の歴史における展開の三者を、神を語ることの前提として示している。つづいて神を語ることが展開されて行く条件について叙述がなされている。このなかで我々は著者が神学の教会との関連や伝統の拘束を受けていること、さらに神学の学問性などについて語っているのを見出すのである。本書は全体として分りやすい叙述がつらぬかれており、通読によって教えられるところは決して少くない。しかし内容が教義学序説と重なっている点が多く、神学概論として細部にわたって触れた論述が少ないのは本書の限界というべきであろう。本書それ自体としては一つのまとまりを示しているにも拘らず、多くの問題を一度に論じつくそうとして果し得なかった欠点が指摘される。

O. Bayer, Was ist das: Theologie? eine Skizze, Stuttgart, 1973

本書もまた一九三九年生れの若き神学者によって記されている。著者バイヤーはもともとルター研究 (Promissio. Geschichte der reformatorischen Wende in Luthers Theologie, 1971) によってその名を知られるようになった。この背景はやはり本書にも反映されており、僅か一一〇頁あまりの小著の内容は、神学の基本的な諸問題を神学史との関連のなかで叙述し展開することとなった。著者はジョン・オースティンの言語理論を援用しつつ考察を進めようとするが、論述の体系的組立てより一九世紀のドイツ理想主義との討論に多くの関心がはらわれている。すなわちヘーゲルに対決して知識と行為に先行する出来事こそ神学の中心であると洞察したシュライエルマッハーに賛成しつつ、他方ルターによる言と信仰の視点にてらしてシュライエルマッハーを批判している。本書が講義や講演をまとめた小論文集にとどまるため、我々はそこから練り上げられた結論をきくことは無理である。それは副題が示しているように一つのスケッチに留まっていると云わねばならない。著者が今後さらに体系としてまとめることを押し進め、本格的な神学概論を仕上げるのを待ちたいものである。

Theologie als Wissenschaft, hrg. von G. Sauter, München, 1971;

Wissenschaftstheoretische Kritik der Theologie. Die Theologie und neuere wissenschaftstheoretische Diskussion. Materialien. Entwürfe, hrg. von G. Sauter in Verbindung mit J. Courtin, H.-W. Haase, G. König, W. Raddatz, G. Schultzky, H. G. Urlich, München, 1973

ここにあげられた二冊の書物は、いずれも現在ボン大学神学部教授として活動しているザウター（一九三五年生れ）の編集になるものである。ザウターにはすでに Vom einen neuen Methodenstreit in der Theologie? 1970 と題する小著があり、またその他いくつかの論文を通して、神学における理論形成の新しい課題を訴えてきた。さきにあげた二冊のうち前者には、二〇世紀神学における神学の学問性を取り扱った論文が集められている。トレルチ、ティリッヒ、バルトを始め代表的神学者の立場を読者は理解し得るほか、詳細な文献表も学習に便利である。またザウター自身が冒頭に七〇頁近くに及ぶ入門的論述をなしているのは問題点の整理に役立ち、全体として良くまとまった参考書と云うことが出来よう。これに対して後者は、ザウターが最近ひろく関心をもたれ始めた「学問理論」Wissenschaftstheorie との接触を通して、神学の基礎づけを意図するところからなされた試みである。したがって哲学、社会学、神学などの各領域から多くの研究者がチームを構成して始めて可能な仕事であった。神学に分析的思考のスタイルを導入して新たな刺戟としたいとする問題意識は何人も評価するであろう。整理された結論を求めるのではなく、今後もさらに継続されるべき討論の出発点として本書は意義があろうと思われる。

W. Pannenberg, Wissenschaftstheorie und Theologie, Frankfurt, 1974

この四〇〇頁をこえる書物は、現在ミュンヘン大学プロテスタント神学部において組織神学教授として活動している、パネンベルク（一九二八年生れ）によってしるされたものである。本書は前述のザウターの場合と類似した問題意識、すなわち批判的合理主義が提起している学問理論の課題を、如何に神学が受けとめてその学問性を明らかにする討議に寄与すべきかという所から出ている。前半の第一部は広範な学問論とその近代における歴史的展開が跡づけられている。批判的合理主義は云うに及ばず論理実証主義、解釈学を始め人文科学、社会科学全体を概観しつつ、学問論の主要問題をまとめている。つづいて後半の第二部においてパネンベルクは、神学の学問性をこうした学問全般の世界を視野におきつつ解明しようとする。神学史において多くの見解を生んだ神学の学問性であるが、彼の場合に

は神学を神に関する学 Wissenschaft von Gott として、その根拠づけを人間の自己および世界経験のなかに見ることで解決され、神学諸部門の緊密な結びつきも可能であるとしている。本書において文字通り広い諸学問の分野で行われている討論のあとをまとめた第一部は特に評価されるべきであろう。この意味では本書は学問理論と神学の課題を追求した最近の成果のうちで参考書として最良のものと云うことが出来る。しかしながらその反面、ベネンベルクが本書の第二部において論じた神学の学問性に関する叙述は、端的に云って必ずしも独創的であるとも思えないところがある。その点は事柄の重要さにかんがみ今後の展開に期待したく思うものである。

A. Grabner-Haider, Theorie der Theologie als Wissenschaft, München, 1974

グラーブナー・ハイダーによる本書は次にあげるガッニマイアーの著作とともに、学問理論の問いに対するカトリック神学における反響と見ることが出来る。グラーブナー・ハイダーは本書の前半において近代的論理学の入門から始まり分析的学問理論の概要をまとめている。これに比べて分量のうえからも更に簡単であるが、学問としての神学を後半において論じている。その際に力点が組織部門におかれる結果になっている。全体として見るならば本書は前半の概論的叙述にいくばくかの意味が認められるが、後半の神学に関する部分に質量ともに見劣りが目立つのは残念である。綿密な論議を必要とするところで、しばしば簡単に通りすぎて終る場合があり、惜しまれる点として指摘されねばならない。

M. Gatzemeier, Theologie als Wissenschaft?
Bd. 1 Die Sache der Theologie
Bd. 2 Wissenschafts- und Institutionenkritik Stuttgart-Bad Constatt, 1974/75

著者ガッニマイヤー（一九三七年生れ）はコンスタンツ大学講師として活動している哲学専攻の研究者である。構成主義 Konstruktivismus の系統にそくする著者は、神学ならびにそれを支える社会的制度としての教会を、根本的に批判検討しようとする。神学は神の言を方法的に正確に理解せしめることに成功していないし、この意味で神を語ることに神学は挫折せざるを得なかったとガッニマイヤーは批判をしている。さらに神学の学問性ならびにそれが教会のイデオロギーとして主張される問題が取りあげられつつ、著者により「神」の言の再構成を基本とする学問的かつ解放者的神学の理論が目ざされている。本書は著者が哲学専攻の人でもあり神学概論の細部にわたる論述は聞けないが、しかし神学成立の根源的課題をついた点で重量感をおびる著作として評価できるであろう。ただ扱われた問題の重要さにも拘らず、当然ふれられて然るべき言語分析や構造主義の課題が意外に手薄に終っているのは惜しいと思われる。

U. Köpf, Die Anfänge der theologischen Wissenschaftstheorie im 13. Jahrhundert, Tübingen, 1974

本書はチューリッヒ大学神学部に提出された学位論文である。すでに多くの著作によって論ぜられてきた神学の学問性を問う今日の課題を念頭におきつつ、著者は一三世紀にさかのぼって当時の神学がその成立根拠、対象および主体、諸学問との関係、神学諸部門の関連などの基本的問題を如何に解決しようと努めたかを明らかにすることを試みる。こうした神学史的探究がこんにちの論議に不可欠であることは云うまでもない。スコラ学の材料を当時の古文書によってきまで検討した精密な研究成果がここに提出された意義を、我々は決して少く評価すべきではないと思う。一三世紀にすでにこんにちの神学の学問性をめぐる激しい対決の始まりが刻印されていることを知るのは意味が深いからである。特に本書の末尾に、神学的学問論に関する当時の命題集や大全をまとめた一覧表がそえられている。それはまことに貴重なものであり、整えられた文献表とともに利用して教えられる点が少くない。

Wissenschaftliche Theologie im Überblick, hrg. von W. Lohff & F. Hahn, Göttingen, 1974

この小冊子は一九七四年四月にゲッチンゲンにおいて行われた Wissenschaftliche Gesellschaft für Theologie の創立記念学術大会における講演をまとめたものである。その際に基調講演をなしたエーベリンクのものは別に発表されている（G. Ebeling, Die Klage über das Erfahrungsdefizit in der Theologie als Frage nach ihrer Sache, in: Wort und Glaube, Bd. III, Tübingen, 1975, S. 3–28 に収録）。したがって本書には神学各部門を代表してなされた講演が六つの論文の形をとり集められている。通読して受ける印象はむしろ地味な研究の現状報告や問題提起であり、神学各部門のより密接な協力を求める試みにとどまる感がする。あるいはこの種の会議においては行われた討論の中に、今後の課題を端的に示すものが浮き彫りにされているのであろうか。

G. Ebeling, Studium der Theologie. Eine enzyklopädische Orientierung, Tübingen, 1975

本書はいまや円熟期に入ったエーベリンクによってしるされた神学概論である。さきにふれたベネンベルクの著作が神学の

成立根拠を学問理論との接触を通して究明しようと努めたのに対し、ヱーベリンクは本書では神学の中心内容にふれつつ、もっぱら神学全部門にわたる論述を行おうとしている。彼自身はすでにハンス・アルベルトとの論争（Kritischer Rationalismus? Zu Hans Alberts "Traktat über die Kritische Vernunft", ZThK, 1970, Beiheft 3）を行っている事情も考慮して、神学各部門の論述を中心に、ひろく自然科学、人文科学、人間科学などの問題にもふれるというまとめ方を行ったと思われる。本書は神学全般の課題をくみ取るには良く整理されており、たしかに内容的に密度の高いものである。二〇〇頁たらずの書物の熟読によって恐らく読者はそれぞれに得るところがあるものと確信している。それと共にヱーベリンク（一九一二年生れ）より若い読者は、必ず細部の論述について満足できぬものを見出して当然であろう。評者としても倫理学や実践神学の章にいささか弱点を感ぜざるを得ないし、全体としてヱーベリンクが神学部門の分け方そのものの存在理由を学際研究の必要性と関連して問う姿勢が、本書ではそれほど明確でない点に問題をおぼえるのである。

所定の紙数をこえているため、このほか論文集の形で神学概論を内容的に展開したものについて、以下に言及するにとどめたい。

B. Casper-K. Hemmerle-P. Hünermann, Theologie als Wissenschaft. Methodische Zugänge, Freiburg i. Br., 1970
Die Theologie in der interdisziplinären Forschung, hrg. von J. B. Metz & T. Rendtorff, Düsseldorf, 1971
R. Weth-C. Gestrich. E.-L. Solte, Theologie an staatlichen Universitäten? Stuttgart, 1972
W. Pannenberg-G. Sauter-S. M. Daecke-H. N. Janowski, Grundlagen der Theologie —ein Diskurs—, Stuttgart, 1974
T. Rendtorff-E. Lohse, Kirchenleitung und wissenschaftliche Theologie, München, 1974
Theologie zwischen Anpassung und Isolation. Argumente fü reine kommunikative Wissenschaft, hrg von H. Siemers, Stuttgart, 1975
G. Sauter-T. Strohm, Theologie als Beruf in unserer Gesellschaft, München 1976

最後に神学のありかたを古代、中世、宗教改革と展開した跡をふりかえって論じた、小冊子ながら読物としてすぐれた著作をあげておきたい。

H. A. Oberman, Contra vanam curiositatem. Ein Kapitel der Theologie zwischen Seelenwinkel und Weltall, Zürich, 1974